古都ウィーンの五百年を象徴し、今なお耀くフレッシュな歌声

ウィーン少年合唱団

ただ可愛いだけでなく、ただただピュアなだけでもない。びしっと背筋を伸ばして音楽にまっすぐに取り組む少年たち。元気と優しさを併せもつ彼らの歌声が、東京に爽やかな空気を運んでくる!

文=岸 純信(オペラ研究家)

©www.lukasbeck.com

実はまだ、ウィーン少年合唱団の生の演奏には接したことがない。しかし、その高い実力の程は三十年前から知っていた。筆者が初めて買ったオペラの全曲盤《魔笛》に、この合唱団から三人が童子役で参加していたからである。自分たちのトリオだけでなく、お姫様役のソプラノと絡む四重唱ものびのびとこなしていた彼ら。その腕前にはまさに舌を巻いた。でも、ただ一つ惜しかったのは、キャスト表に彼らの個人名が無く、「ウィーン少年合唱団員」とのみ記されていたこと。名前が明記されていたならば、いっそう励みになっただろうにと同情してみたりもした。

世界中から集まった歌好きの少年たち

でも状況は徐々に変わってきたよう。最近のディスクには、ソリストを務める少年の名も掲載されているからだ。なにしろ15世紀末から五百年余という歴史を育む合唱団である。変化や改革も焦らずゆっくりと行われるのだろう。18世紀にはモーツァルトが曲を書き、19世紀初めにはかのシューベルトも一員であったというこの少年合唱団は、1918年までは宮廷のためだけに歌っていたが、現在では日本を含む世界中から団員が集い、十歳から変声期前の十四歳ぐらいまでの約百名が寮生活を行いながら音楽教育を受けている。つい先日もテレビ番組で彼らの練習風景が紹介されていたが、その涼やかなハーモニーと曇りのない笑顔は、多くの心をまさに和ませるもの。規則正しく厳しい修練を消化して、チームワークを最優先に、限られた数年間を精一杯過ごすからこそ、声も心もひときわ澄みきって、純度の高いアンサンブルを繰り広げてくれるのだろう。

さて、そのウィーン少年合唱団が今年の初夏にやってくる。普段から四つのグループに分かれて活動する彼ら、団と縁の深い作曲家の名がそれぞれ付けられ、今回はトルコ出身の若手指揮者ゼツェンが率いる「ハイドン組」の24名が来日、日本人のKeiji君もメンバーの一人である。透明感に満ちた彼らの歌声は、ヴィヴァルディやブルックナーの宗教曲、それにオペラ《カルメン》の児童合唱といった伝統のジャンルに打ってつけだが、近年ではポップスや欧州以外のメロディも幅広く取り上げており、今回もビートルズや《サウンド・オブ・ミュージック》のメドレー、それにマイケル・ジャクソンらが歌った〈ウィ・アー・ザ・ワールド〉を歌うという。さらに楽しみなのは、槇原敬之のリズミカルな名曲〈世界に一つだけの花〉も披露してくれること。元気いっぱいの少年たちならではの弾けっぷりを、今年こそ生のステージで体験してみたい!

Concert

Canon Presents
ウィーン少年合唱団
2010年日本公演

5/2(日) 14:00〈Aプロ〉
5/4(火・祝) 14:00〈Bプロ〉
6/6(日) 14:00〈Aプロ〉
以上、サントリーホール

6/11(金) 19:00〈Aプロ〉
6/12(土) 14:00〈Bプロ〉
6/13(日) 14:00〈Aプロ〉
6/20(日) 14:00〈Bプロ〉
以上、東京オペラシティコンサートホール

Aプロ:イマジン(ジョン・レノン)/『サウンド・オブ・ミュージック』から/ウィ・アー・ザ・ワールド/さくらさくら 他

Bプロ:グリーンスリーブス/ウィーンの森の物語(J.シュトラウスⅡ)/世界に一つだけの花/アメージング・グレイス 他

S¥7000 A¥5500 B¥4000 C¥2500
P¥1000 学生各半額 (税込)
※他にシニア、車椅子など割引あり

お問合せ:ジャパン・アーツぴあ
☎03-5237-7711

ウィーン少年合唱団

1498年創立、世界の数ある少年合唱団の中でも抜群の人気と実力を誇る。10~14歳の約100名のメンバーは、アウガルテン宮殿で全寮制の生活をし、ハイドン、モーツァルト、シューベルト、ブルックナーという合唱団ゆかりの作曲家の名がついた4グループに分かれて活動する。ウィーン国立歌劇場でのオペラにも出演し、ウィーン・フィルともしばしば共演。今回来日するのはハイドン組。